

現代トルコのアラブ・アレヴィー社会における社会変容と秘密主義の実践

平成 27 年入学

派遣先国：トルコ共和国

山崎 暁

キーワード：アレヴィー，秘密，シーア派少数派，社会変容

対象とする問題の概要

現代トルコにおけるエスニック集団のひとつであり、主にトルコ南東部の地中海沿岸地域に集住するアラブ・アレヴィー（原語：Arap Alevi）は、一般的にイスラーム世界の次の集団と同定されている。すなわち、シーア派少数分派のひとつであり、グラート（極端派）と呼ばれるイスラーム思想史上の伝統に位置づけられるアラウィー派（ヌサイリー）である。今日、同派のコミュニティはシリアを中心にトルコ、レバノンなどに存在する。その教義は、預言者ムハンマドの従弟アリーの神格化を中心に、三位一体論、輪廻信仰などで構成され、イスラーム世界の多数派であるスンナ派、またシーア派の主流派ともかなり異なる信仰をもつことが知られている。また、そのためにアラウィー派の人々は歴史を通じて多数派の人々や為政者から迫害・弾圧の対象とされ、タキーヤ（信仰隠し）の実践が現在に至るまで行われてきたとされる。

研究目的

アラウィー派に関する既存の研究の多くは、秘教的な性格をもつ同派の教義を原典史料や同派出身者の著作等を通じて明らかにしようとするものや、史資料から彼らと他者（スンナ派学者、欧米宣教団など）との関係を分析するもの、あるいはシリアのアサド政権との関係を論じるものが中心であった。本研究では、そうした研究において本質視されがちであった同派社会の秘密性やマイノリティ性を、トルコという近代国家固有の社会的・政治的文脈におけるコミュニティの変容との関係で捉えなおし、人類学・社会学における秘密と社会集団の関係に関する理論を参照しつつ、現地の人々の実践によってそれらが具体的にどのように生成・変容しているのかを明らかにしたい。そうすることで、ひいては現代イスラーム世界において宗派というカテゴリーがもつ意義や、本質化されがちな少数宗派内の多様性の一端を理解することに貢献できると考えている。

フィールドワークから得られた知見について

今回は、博士予備論文・博士論文の執筆に向けた一次資料や現地学術資料の収集、同領域で研究を行う現地研究者からの情報収集、長期のフィールドワークに向けた調査候補地の選定を主な目的とし、約2カ月間トルコに滞在した。今回の滞在では、国内外の情勢が不安定化しているという状況を最大限考慮し、

計画の一部変更も行いつつ調査を進めた。アラブ・アレヴィーの集住地域であるトルコ南部の3県（ハタイ、アダナ、メルスィン）すべてを訪れ全体像を把握するという当初の予定は変更せざるをえなかったが、最大のコミュニティが存在するハタイ県に約3週間滞在し、関連市民団体への訪問や信仰・社会生活等についての聞き取り調査等を実行することができた。アラブ・アレヴィーにとって最も重要な参詣地であるとされるフズル・マカーム（サマンダー市）において、一年のうちで最大の祭礼であるガディール・フム祭の様子を観察し、彼らの日常的宗教実践の実態を垣間見られたこと、聞き取り調査を通じて、コミュニティ内部の組織化の実態とその理念や活動内容・規模の多様性を確認できたことは、今回の調査の大きな成果であった。

今後の展開・反省点

今回のフィールド調査では、研究対象の限定と調査・分析の深さという点で反省が残った。そのため今後の当面の課題として、アラブ・アレヴィーのアイデンティティの再定義やコミュニティを取り巻く社会変容などの問題に積極的に関わる現地の市民団体の活動内容の調査・分析を通じ、秘密主義とそうした実践との関係に関して具体的に検討することを目指したい。まずは、今回のフィールド調査で収集した一次資料（アラブ・アレヴィーの市民団体が発行する月刊誌）に見られる主張の分析を行うつもりである。また、これらの市民団体の多くが現地の宗教・社会的指導者を中心に組織・運営されているなか、大都市部で教育を受ける若者によりトルコ社会・文化への同化への抵抗を目指す運動が実践されていることが今回の調査を通じてわかった。比較対象として彼らの活動・主張内容についても早急に把握することを目指したい。



調査地地図



参詣に訪れる人々で混み合うガディール・フム祭当日のフズル・マカーム（サマンダー）



祭りのための犠牲獣の肉を大鍋で調理する男性。ハタイのアラブ・アレヴィー社会では年間 100 を超す祭礼が祝われるという。



ハタイでの結婚式の様子。アラブ・アレヴィーには世俗的な人が多いといわれ、都市部ではスカーフを被った女性はほとんど見られなかった。